

# ドイツの教育制度

中嶋来未

## 1 はじめに

私は将来、小学校の先生になりたいと考えています。小学校 4 年生の時からずっと変わらない夢なので、今回のドイツ留学での訪問場所も教育現場を希望しました。残念ながら小学校を訪問することは叶いませんでしたが、保育所やギムナジウム、大学、図書館など様々な教育施設を訪れることができました。

## 2 保育所

開園時間は州、地域によって異なっており、ベルリンの 19 時半までが最も遅いです。また、日本のように時間割を組んで、お遊戯、お絵かき、運動といったプログラムを次々にこなし、団体行動をする、ということはなく、自由保育が中心となっています。

私たちが訪れたアウクスブルクの保育所では、子どもたち一人一人の成長を記すフォルダがあり、子どもたちにも自由に見られるように置かれていました。気になる給食については、給食用の部屋が 1 部屋あり、献立などがはってありました。また、その部屋は家から持ってきた朝食をとったり、おやつを食べたりする際にも使用されます。

行事は秋祭りとクリスマスがメインで、施設内にプールはありませんでした。私たちが訪れた時間は、子どもたちはお絵かきしている子どもやブロックで遊んでいる子どもがおり、それぞれ先生が 1 人ずついま

した。そこで、あの有名なグミ、HARIBO を子どもたちに配ってあげて、と先生たちからたくさん HARIBO を受け取りました。そのおかげで、たくさん子どもと「ダンケ」、「ピテシェン」(ありがとう、どういたしまして)と会話することができました。



どの国においても、幼児期は、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる重要な時期です。幼児は生活や遊びといった直接的・具体的な体験を通して情緒的な発達や社会性を獲得していきます。したがって、幼児期における教育が、その後の人間としての生き方を大きく左右する重要なものであるといえます。

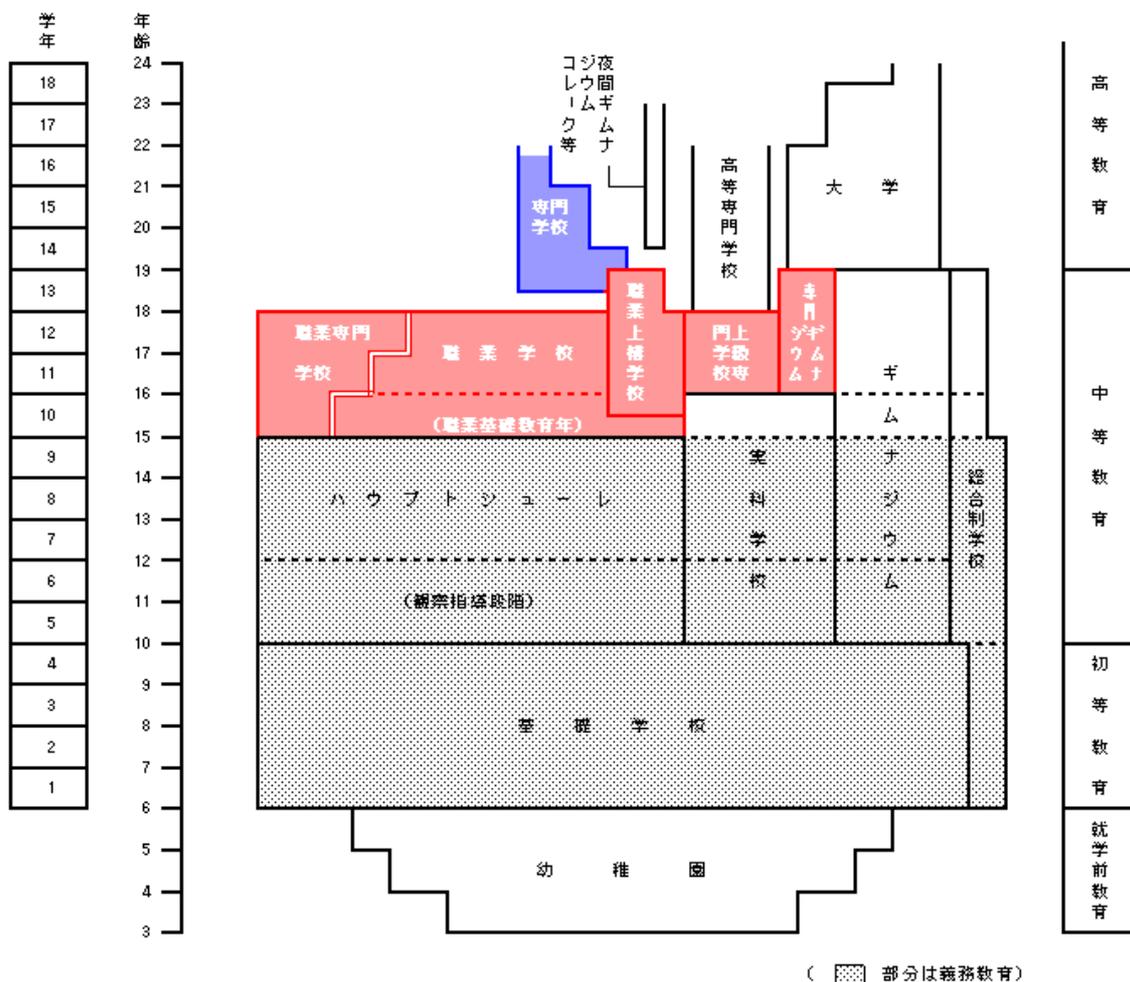
## 3 ギムナジウムとは

ドイツ 5 日目の午前中にアウクスブルク市内のギムナジウムを訪問しました。実験室やパソコンルームを案内してもらった後、実際に授業を見学させてもらいました。横に長い 1 つの机に 8 人ほどの生徒が座っており、4 列ほど机が並んでいました。

私が見学した英語の授業は、先生が英語しか使わず、生徒もまた全て英語で答えるという形で行われていました。先生の質問に対して思わずドイツ語で答えていた生徒は英語で答え直すように注意を受け、一生懸命考えて答え直していました。「日本の好きなところは？」という先生の質問にはお寿司が1番に上がっていました。たしかに、

ドイツのショッピングセンターには、回転寿司が通路のど真ん中にあり、非常にはやっているようでした。

### ドイツの学校系統図



授業が終わると15分の休み時間があり、生徒はサッカーをするために急いで教室を飛び出してきました。服はどの学年も私服で靴などの指定も無いようでした。日本と比べて、ドイツの方が先生の質問に対して

多くの生徒が積極的に手を挙げているように感じました。分からないことがあった際には、隣の友達に聞くのではなく、すぐに手を挙げて大きな声で先生に質問している様子が印象的でした。

ここで詳しくドイツの教育制度を見てみます。

## 就学前教育

幼稚園は満3歳からの子どもを受け入れる機関であり、保育所は2歳以下の子どもを受け入れています。

## 義務教育

義務教育は9年(一部の州は10年)です。また、義務教育を終えた後に就職し、見習いとして職業訓練を受ける者は、通常3年間、週に1~2日職業学校に通うことが義務とされています(職業学校就学義務)。

## 初等教育

初等教育は、基礎学校において4年間(一部の州は6年間)行われます。

## 中等教育

生徒の能力・適性に応じて、ハウプトシューレ(卒業後に就職して職業訓練を受ける者が主として進む。5年制)、実科学校(卒業後に職業教育学校に進む者や中級の職につく者が主として進みます。6年制)、ギムナジウム(大学進学希望者が主として進む。8年制)が設けられています。総合制学校は、若干の州を除き、学校数、生徒数とも少ない。後期中等段階において、上記の職業学校(週に1~2日の定時制。通常3年)のほか、職業基礎教育年(全日1年制)、職業専門学校(全日1~2年制)、職業上級学校(職業訓練修了者、職業訓練中の者などを対象とし、修了すると実科学校修了証を授与。全日制は少なくとも1年、定時制は

通常3年)、上級専門学校(実科学校修了を入学要件とし、修了者に高等専門学校入学資格を授与。全日2年制)、専門ギムナジウム(実科学校修了を入学要件とし、修了者に大学入学資格を授与。全日3年制)など多様な職業教育学校が設けられています。また、専門学校は職業訓練を終えた者等を対象としており、修了すると上級の職業資格を得ることができます。夜間ギムナジウム、コレークは職業従事者等に大学入学資格を与えるための機関です。

また、ドイツ統一後、旧東ドイツ地域各州は、旧西ドイツ地域の制度に合わせる方向で学校制度の再編を進め、多くの州は、ギムナジウムのほかに、ハウプトシューレと実科学校を合わせた学校種(5年でハウプトシューレ修了証、6年で実科学校修了証の取得が可能)を導入しました。

## 高等教育

高等教育機関として、大学(総合大学、教育大学、神学大学、芸術大学など)と高等専門学校があります。修了にあたって標準とされる修業年限は、通常、大学で4年半、高等専門学校で4年以下とされています。これを超えて在学する者が多くいます。

以上から分かるように、ギムナジウムには9歳離れた生徒たちが同じ校舎で学んでいます。階段でとても背の高い男の子と、とても小さい男の子が話しているのを見た時は、とても新鮮でした。



また、初等教育の教科は 国語と算数が中心で、他に体育、音楽、美術、宗教などがあるが社会や理科はなく、州によっては第 3 学年から週 2 回程度外国語教育（英語、フランス語など）が行われます。

前期中等教育（原則第 9 または第 10 学年まで）教科は国語、数学、社会（歴史、地理、政治）、自然（物理、化学、生物）、英語、労働（技術、経済）、芸能（音楽、美術）、宗教、体育が必修で、他に選択教科があります。

日本では文部科学省というのは中央に一つしかありませんが、ドイツでは各州にそれぞれの文部省があり、それに対応して 16 人の文部大臣がいます。各州の文部大臣によって構成され、出席して行われる州文部大臣会議によって、教育課程や内容の重要な点に関してはできる限り全国的な統一化が行われています。

したがって、学校制度そのもの、各学校の就学年数等、各州によって少しずつ違っているのです。

さらに、ドイツの公立の小学校の授業料は無料であり、親の考え方によっては子どもを 1 年早くギムナジウムに入学させるこ

とができる。

しかし、わずか 10 歳の時点で自分の進路を決めなければならないというドイツの制度は厳しいと思いました。親と一緒に考えてくれるとは言え、まだまだ自分の適性を見いだせる時期とは思えないからです。

ただ、ドイツには働きながら教育を受けられる職業教育制度があるため、必ずしも大学に進学する必要はありません。職業教育制度には企業にとっても、自社に適した人材かを事前に見極めることができるというメリットがあります。

## 4 大学

ドイツ 6 日目にアウクスブルク大学を訪問しました。夏休み期間中だったため、学生は少なかったですが、1970 年に建てられたこの大学は、とても広いキャンパスで自然が豊かでした。また、案内してもらった法学部のキャンパスでは試験が行われており、多くの学生がいました。

なかでも、特に私が驚いたのは図書館です。日本の大学と違って、ドイツの大学の図書館は学科ごとに図書館があります。その中で法律・経済学科は学生が 1 番多いため建物も 1 番大きくなっており、本は 250 万冊あります。水以外の飲食は全て禁止となっており、非常に静かでした。耳栓が図書館の中で販売されているのを見つけた時は衝撃でした。そして、図書館の開館時間が非常に長いこともドイツの大学の図書館の特徴だと思います。なぜなら、平日は朝の 8 時半から夜中の 12 時まで開いているからです。日本の大学の図書館は多少差があってもだいたい夜の 9 時には閉まっているの

ではないでしょうか。ドイツの大学の図書館には、テスト前になるとたくさんの学生が閉館まで残って勉強しているそうです。私たちが案内してくれた学生は、図書館に毎日通っているそうです。

## 5 図書館

ドイツ 3 日目にアウクスブルク市にある市立新図書館を訪れました。まず、入って私たちが驚いたのは、図書館の壁や階段がオレンジと白色で統一されており、図書館の雰囲気がとても明るかったからです。



DVD や CD も多くおいてあり、なんと楽譜までありました。階段を上がると、飲食可能な部屋や進路相談部屋、ピアノ練習室がありました。こんな明るくてきれいな図書館だったら毎日来たいと思いました。また、ドイツは外国出身の人々が多く住んでいるため、ドイツ語だけでなく、フランス語やスペイン語など様々な言語の本が置いてありました。



## 6 最後に

ドイツの教育制度は、日本と異なる点がたくさんあり、驚くことが多かったです。

また、ドイツの学生は携帯をほとんど触らないという発見をしました。ホストファミリーだけでなく、町で見かける学生も携帯を使用している姿を全然見ませんでした。日本では、電車の中では大半の人が携帯を触っており、友だちと一緒にいるときでもそれぞれが携帯を触ることがあります。今の私たちには、画面ではなく、言葉で会話する時間を増やす必要があるように思いました。

そして、このドイツ派遣で学んだこと、気づいたことを日常生活で活かしていこうと思います。